P-37

部活動での友人関係は中学生の問題行動を抑制するのか

新潟医療福祉大学　健康スポーツ学科　田村拓実
羽田智紀
遠山孝司

【問題と目的】

文部科学省(2009)の「児童生徒の問題行動調査」では,全国の小中学生,高校生による学校の内外での暴力行為の件数が平成20年度は約6万件で前年度より11.5%増え過去最多であり,中学生は暴力行動の件数が初めて4万件を超えている.

では,どうしたらこのような問題行動を減少させることができるだろうか.中学生になると悩みがあるときの相談相手として友人を重視する傾向があり,親や教師から受ける影響よりも同世代の友人からの影響が強くなるといえる.ここから,友人関係と問題行動は密接に関係していると考えられる.

学校生活の中で一番思い出に残っていることを挙げさせると,良い思い出と悪い思い出の両方で「部活動」が首位となっている(小島,2004).部活動に所属している生徒は部活動内で友人関係を形成しやすく,部活動に基づいた人間関係を重視しやすい傾向にある(鈴木・桜井,2000). そこで本研究では,「部活動」での友人関係に注目したい.部活動の友人関係によって問題行動が抑制されるだろうか.

まず,部活動は競技の特性を考慮し個人競技と団体競技で分類する.これは所属する部活動の競技特性が違えば,友人関係も異なると考えられるためである.

まず,「同じ部活動内で仲の良い友人がいる個人競技に所属するもの」,「同じ部活動内で仲の良い友人がいる団体競技に所属するもの」,「それ以外のもの」の3群で問題行動への抵抗感が異なるかを検討する.更に群ごとに友人との心理的距離のとり方と抵抗感が関連するかについて検討する.

また,本研究では友人関係を友人集団と親友とに分け調査する.　友人集団,親友のそれぞれの影響を調査することで,中学生が考える友人集団,親友についての機能の違いを知ることができるのではないのだろうか.

今回は反社会的問題行動のみを扱うものとする.これは集団意思決定におけるリスキーシフト現象のように部活動での友人関係の集団行動が問題行動の抑制だけではなく促進にも繋がる可能性が考えられるためである.部活動での友人関係は,中学生の問題行動の抑制に貢献するのであろうか.

【方法】

新潟市内の公立中学校2年生,135名.男子76名女子59名,平均年齢は,13.56歳.

平成22年10月の授業時間の一部を利用し,集合調査法によって実施.

友人に対しての心理的距離のとり方を測定するために,藤井(2001)が用いた「心理的距離のとり方」についての因子分析の結果を参考にし,各因子への因子負荷量の上位項目を抜粋,使用した.「表面的関係から踏み出せない距離のとり方」「密着しようとする距離のとり方」「互いの領域を守る距離のとり方」「相手主体で同調する距離のとり方」「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」「互いを支配しようとする距離のとり方」の6因子20項目について評定を求めた.

【結果と考察】

部活動での友人関係の持ち方が,問題行動への抵抗感や友人との心理的距離に関連しているかを検討するために,問題行動への抵抗感,友人との心理的距離のそれぞれについて,個人競技,団体競技,その他(部活動に所属しない)友人関係(友人集団)(被験者間要因:3水準)の被験者間計画の1要因の分散分析を行った.主効果が有意であった場合には Tukey の多重比較を用いて,差異がどこにあるのかを検討するものとした.友人関係(親友)についても同様の分析を行った.

分析の結果,友人集団,親友のどちらの友人関係であっても個人競技の部活動に所属し同じ部活動内で友人関係を築くもの,団体競技の部活動に所属し同じ部活動内で友人関係を築くもの,部活動に所属しない,または違う部活動内で友人関係を築くものの3つの群の間には,問題行動への抵抗感に有意な差はみられなかった.

原因の1つとして,調査対象の全体的な抵抗感の高さが考えられる.調査を依頼した中学校は生徒指導に力を入れ,県内の中学校の中でも生徒がまじめであることが影響しているのではないだろうか.

しかし,藤井(2001)が用いた「心理的距離のとり方」と問題行動に対する抵抗感について関連を検討するため,個人競技群,団体競技群,その他群のそれぞれについて心理的距離のとり方と問題行動に対する抵抗感の得点の相関係数を算出したところ,個人競技群で「密着しようとする距離のとり方」についての抵抗感の相関は $r=-.447$ ($p<.01$) で有意であった.これは個人競技の部内で友人を作れば,常に一緒にいたいと強く思うほど,問題行動への抵抗感が高くなることが示されたといえる.個々で活動することが多いため,部活動の中で孤立を強く避ける傾向のある中学生が,友人から否定されることに少しでも繋がるような問題行動をしないことで,孤立を避けようとしたためであると考えられないだろうか.

本研究全体を通して,部活動の友人関係が中学生の問題行動を抑制するのかを検討してきたが,結論としては抑制できているとは言えない.

だが,個人競技をし,同じ部の中に友人がいながらも相手を尊重し,相手とより密接に関わろうとすることで問題行動への抵抗感は高められる可能性が示唆された.

個人競技をしながら同じ部活動内での友人関係を持つことで,お互いを尊重するような関係性が求められる.そのことが問題行動への抵抗感を高めることへとつながっているのかも知れない.人の意見に流されず自分自身の意志で悪いことは悪いと判断できる人間を育成できる可能性があるだろう.